

次の1000年もワクワクするためのSDGs情報メディア

— ツムギノ —

TSUMUGINO

<https://tsumugino.life>



メールマガジンにご登録ください!

ツムギノのメールマガジンでは、もともと京都にある持続可能なエッセンスや、京都で新しく始まっている様々なSDGs情報をお届けしています。
あなたらしいSDGsの「はじめかた」や「つけかた」を教えてください。そのアイデアが、みんなの未来を変えるかもしれません。
その他、ワークショップやオンラインイベントなどの情報もお届けいたします。

TSUMUGINO Vol.3 / 2022年7月発行

発行：株式会社リーフ・パブリケーションズ（京都府京都市中京区烏丸三条上ル場之町592 メディナ烏丸御池4F TEL.075-255-7263）

発行人：高野和也 / 編集人：上山賢司、編集アドバイザー：加藤純子 / 編集協力：広山幸江、堀家秀太 / デザイン：西堀裕美 / デザイン監修：観音寺豊一

マップデザイン：濱口真一 / 印刷：株式会社スイッチティフ

TAKE FREE

※本誌に記載の情報は2022年7月現在のものです。それ以降に情報の変更がある場合にはご了承ください。※表示価格は特に断りのあるもの以外、税込価格です。
※新型コロナウイルス（COVID-19）を含む感染症の感染防止対策として、掲載している情報に変更が発生する場合があります。お出かけ前に掲載先の公式サイトやSNSなどで最新の情報をご確認ください。※本誌掲載の写真・イラスト・地図及び記事の無断転載を禁じます。



TSUMUGINO



Vol.
03
SUMMER - AUTUMN
2022

特集
豊かさへのアクセスキー

美しい心の旅

いっしょに紡ぎましょう
世界は今、次の千年に向けて
動き出しています



THE SIGN FOR THE NEXT 1000 YEARS by Leaf

THE INFINITY IN ONE LEAF

江戸時代後期、四十世・池坊専定がまとめた絵図『挿花百規』を傍に、池坊専宗さんが根付き竹の花器に生けたのは、初夏の到来を知らせる草連玉（クサレダマ）と蛸袋（ホタルアクロ）。窓の向こうから注ぐ日の光を葉が受け止め、草花の間に心地よい風が流れるように。植物の命を感じながら、生けることそのものに価値を見出す専宗さん。

まっすぐな眼差しを植物に向ける専宗さんが、この世に広げていきたい小さな波紋とは。

PHOTO 森 昭人 TEXT 立原里穂

自然、工芸、アート、人、食、酒——。

人は美しいものを見たり、触れたりすると

我を忘れて、その美しさに見入り

心豊かになる瞬間が訪れます。

そして、美しいものを尊び

いつまでも守り続けたいという気持ちは

損得勘定とは関係の無い場所から静かに湧き出てきます。

「心が豊かになるかどうか」を基軸に決める

社会・経済がはじまっている、今。

美しいものに宿る力の秘密をみなさんといっしょに

探してみたいと思います。

一葉の命に宿る美しさ



今回生けて頂いたお花…草連玉と蛸袋。6月の豊かな野に佇む濃淡の緑。その中に儚い蛸袋の白がポッと浮かび上がる。



池坊専宗
Senshu Ikenobo

1992年、京都に生まれる。祖父は華道家元四十五世池坊専永、母は次期家元池坊専好。東京大学法学部卒業。花を生け、生けた花を振り続けている。講座や教室、メディア出演や文筆など様々な形で、花を生ける意味を伝えている。



挿花百規



池坊専応口伝

いけばなのルーツは仏前供花

—— まずは、いけばな発祥の地と呼ばれる六角堂と池坊の関係について、教えていただけますか。

六角堂は約1400年前、この地を訪れた聖徳太子によって建立されました。初代の住職である小野妹子が仏様に供えた花を、代々の住職が受け継ぎ、池坊のいけばなになったと伝えられています。住職の住坊が六角堂境内の池のほとりにあったことが、「池坊」という名前の由来。代々、華道家元が住職を務めていまして、現在の住職は私の祖父である四十五世・池坊専永です。

—— いけばなのルーツは仏様に捧げるお花にあったんですね。

6世紀に中国から伝来した仏様に供える花から、平安時代には和歌の詠み合わせの際に生ける花、室町時代には武士が権力を誇示する

ための座敷飾りの花へと、花を生ける目的が時代とともに変化していきます。大きな転機となったのは京都が焼け野原となり、六角堂にも傷ついた人や亡くなった人が運び込まれた室町時代の応仁の乱。生き残った人々は刀を手放し、花を手に死者を弔い傷ついた心を静めました。花を生けて、死者が生き返るわけでも、延命できるわけでもない。でも、花の命に人間のはかない命を重ね合わせて生けること、その行為自体に尊さを感じ、価値を見出したのだと思います。もてなしや権力といった目的を伴う花から、精神性をともなう道がついた華道への転換です。当時の住職だった二十八世・池坊専応が、お弟子さんや街の人に語った内容をまとめた『池坊専応口伝』にも、いけばなを通して命を見つめることが記されています。この口伝こそ、池坊のいけばなの根幹のひとつ。絵図などを加えてアップデートされながら、弟子からまたその弟子へ。室町後期から560年ほど経った令和の今もなお、祈るように命を

見つめるという教えが、妥当性を持って生きているのです。

—— 専宗さんが葉を優しく見つめながら生けておられるお姿にも、どこか祈りの気配を感じました。

花を生けるというのは命を重ねるということですから、内実の強さを感じることがすごく大事だと感じています。植物というのは、光や風、水といった自然の要素がないと生きてはいけません。根から水を吸い上げて、光を受け止め光合成するのが葉ですから、葉や幹はすごく重要なんですね。花は因果でいうと果にあたる結果の部分です。もちろん咲き誇る花は美しいものですが、命というものは葉であったり幹であったり、少しの歪みであったり。そういうところに宿るんじゃないかと思っています。

THE INFINITY IN ONE LEAF

一葉の命に宿る美しさ



いけばなと石に込めた純粋な祈り

— 今年の春、JR 京都伊勢丹で開催され、注目を集めた「MOVING-持って帰れる石といけばな（あるいは循環する“祈り”）の展示」には、どのような気持ちで挑まれたのですか？

アートや作品と位置付けると、見る人との距離が離れてしまう気がして。ですから、私の生ける花はただの花、作品とは呼んでいません。ですから名前もつけません。今回はお声がけた参加者がなにかを感じて持ち寄った石を、私のいけばなと一緒に展示。来場者は会場中を歩き、あちこちで立ち止まり、しゃがんで石に触れ、気になった石はどれでも自由に持ち帰れるというものにしました。百貨店という幅広い層が集う場所でしたので、お子さま連れの方など普段はいけばなに馴染みがない方も見てくださり嬉しかったです。たくさんの方に石を連れて帰っていただき、予備の石も使い切ったほど。素朴な花のまわりに並んだ名もなき石は人の群像のようでもあり、純粋な人の気持ちにつながり、そこから分散して世界に溶け込んでいくような空間になりました。

— 名もなき石に心を留めてみる。現代を忙しく生きる人々は、意識をしないとそんな時間を味わう余裕がないかもしれませんね。

石といっても小さな石ですから、立った大人を目線で見ると詳細はわからない。でもしゃがんで、持ち上げたり、裏を見たり。目を凝らしてみると、何か心に感じるものがあるのです。実

は自分にとって意味のあるものは、日常にありふれているのです。今は SNS や ネット でも て は や ざ れ て い る も の に 意 味 を も た せ よ う と す る 風 潮 が あ り ま す が 、 い つ も の 散 歩 道 に だ っ て 心 動 か さ れ る も の は あ る と 思 い ま す 。 大 事 な こ と は 、 そ こ に 足 を 止 め て し ゃ が も 感 度 を 持 っ て い る か だ ろ う か 。 自 分 の 感 覚 の ま ま に し ゃ が ん で み る 人 は 、 自 分 に と っ て 意 味 の あ る も の を 自 分 で 見 つ け ら れ る 人 な の だ と 思 い ま す 。 石 を 選 ぶ 時 、 人 と 違 う も の を 選 ぶ と か 、 高 く 売 れ る も の を 探 す と か で は な く て 、 そ の 石 に 触 れ る と 外 界 や 、 世 界 と つ な が っ て い る 感 覚 が 持 っ て 可 が 大 切 。 そ の 感 覚 の 純 粋 さ は 、 祈 り に つ な が る も の で も あ る と 思 い ま す 。 純 粋 な 自 分 の 心 の あ り 方 を 知 る こ と は 、 生 き る た め に す ぐ 重 要 な こ と で す 。 こ れ か ら も い け ば な を 通 じ て 、 純 粋 な 祈 り の よ う な 世 界 を 表 現 し て い き た い で す 。

— いけばなと平行して写真の表現もしておられますが、それぞれに向き合う姿勢は、異なるものですか？

ハサミを持っているか、カメラを持っているかの違いだけで、ほぼ一緒ですね。いけばなも写真も、自分の感覚や方向性がすごく大事だと考えています。いけばなでいえば、「美しく見えるよう生けよう」なんて思うと、ちぐはぐな花になっていきます。花も生きていて、そこには光、水、風があり、茂り、咲き、枯れる。そのことを感じて、命をただ生けています。写真も同じで、「美人に見せたい」「物体をよりよく見せたい」のではなく、自分がいいなと純粋に思えたものを撮影したい。自分の理想に他者を合わせる

のではなく、光や花の調子に自分を合わせながら生けたり、シャッターを切ったりしています。求めるより受け入れる、そんな気持ちでいつもいられたらと思っています。

「MOVING-持って帰れる石といけばな（あるいは循環する“祈り”）の展示」より



植物の命を見つめる孤高の芸術

— 室町時代の文献に“池坊”が記載されてから、脈々と受け継がれているのは“美しい花を生けること”ではなく“命を見つめること”だったのです。その伝統を担っていかれるご自身のいけばなは、これからどうありたいとお考えですか？

私の花に派手さはなく、どこかじじくさいと言われることもあります（笑）。そのように賛否はあると思いますが、人に褒められるために花を生けているわけではないですし、周囲が良いといっても自分が良いと思わなければ、それは自分の花ではなくなってしまいます。いけばなは植物の命ありき、そこがほかの芸術と決定的に違うと思っています。もし自分より花に心を向けられず自我が勝つてしまえば、池坊のいけばなではなくなくなってしまいます。長い歴史の中でたくさんの方が植物の命を見出し、型を見出し、そこからまた変化する術を見出し、積み重ねられて今があります。けれど、私は新しい変化を求めるよりも、令和から昭和、戦前、江戸、室町、あるいはその昔まで回帰していくように、花を生けたいと考えています。時代とともにいつかオリのようなものを流し、より本質的に命を見つめる方向に向かいたいと考えています。言うなれば、自分の痕跡すらも消えていくようなあり方です。アスファルトの隙間に咲いている草花の存在に気づき、ただそこにある

命を見つめ、心を重ねる、というのが理想ではないかと感じています。見た目の美しさや物珍しさに目や心を奪われがちですが「カーテン越しにゆらめく朝の光」「六角堂の緑とお参りする人の姿」など、美しいものはすぐ近く、そして目の前に広がっています。美しさは探しに行くのではなく、受け入れた時にやってくるものではないかと思うのです。これが、池のほとりで命を見つめてきた、池坊のひとつの道です。

— 効率や成果、スタイルばかりにとらわれて、自分を見失う。今ここに生きているという実感を持ってない現代人の心に、専宗さんのいけばながそっと寄り添ってくれそうです。活動の幅を広げていきたいなど、今後の展望はありますか？

私はブームをつくることや、マーケティングすることに興味がないですけど、いけばなで何かをお伝えできれば、という気持ちはあります。実際に私が生けた花や写真から何かを感じたり、私が話した言葉が心に留まったり。発信したことがわずかでも伝わればそれでいい、と思っているんです。一粒の雫が落ちて静まった水面に波紋が広がっていくように、ゆっくりと見る人の心を溶かしていくようなことができれば。そのひたむきな行為をずっと繰り返していきたい。雨垂れ石を穿つ、という言葉があるように、持続していれば人の心もじわっと動いていくのではないかと。そういう人が増え、あるいはその人の中の気づきが深まっていけば、



波紋はどんどん大きいものになり、命を見つめるいけばなの魅力が、より多くの人に伝わっていくのではないかと感じています。もちろんたくさんの方にいけばなを見ていただくことも、大切ではありますが、たとえ一人しか見ていなくても、一万人が見ていても、同じように花を生け、同じように写真を撮りたい。信じた道を決して崩さず、命を生けることを繰り返し、感覚を深めていけたらと思っています。



スペシャル対談
持続可能な美しさとは



あるがままの自然と自分を信じて
ゆらぐことのない真の美しさを

TriYoga講師、yinyangクリエイティブディレクター、モデル マーヤ・ハンソン
× NEMOHAMO 一宮 衣恵 (NEMOHAMO事業部長)

植物をまるごと使ったオーガニックコスメブランド・NEMOHAMO。店頭でそのブランドポリシーを伝える一宮衣恵さんが、TriYogaインストラクターとして活躍するマーヤ・ハンソンさんと一緒に鴨川へ。人は自然の一部であるということや、自然の力や既に人に備わっている力に目を向けるため、マインドフルネスなヨガ時間を共有しました。

*個人の感想です。効果には個人差があります。

NEMOHAMO
ネモハモ

和漢として知られる「オタネニンジン」を中心に、有機栽培や農業不使用で大切に育てられた様々な植物の、根も、葉も、茎も、花も、実もまるごとのエキスをういたアイテムを展開する京都発のオーガニックコスメブランド。2019年12月販売開始。

Maaya Hanson
マーヤ・ハンソン

京都府出身。祖母が暮らすスコットランドで生活していた10代のころ、郊外学習のひとつとしてヨガに出会う。帰国後、出産を機に自分の心と体に向き合う時間を持つため、ヨガスタジオ「TAMISA」に通い始める。現在は、ゆったりとした呼吸とフローで意識を内側へと向けるTriYogaインストラクターとして活動。2020年から毎月開催する「naked market」の主催者でもあり、二児の母。



一宮さん



マーヤ・ハンソンさん

植物のエネルギーを享受して
季節の変わり目も健やかに

— 意識的にゆるむ方法を習得し、心の縛りをほどいていく。TriYogaインストラクターとして美しく生きるマーヤさん。普段はどんなスキンケアをされていますか？

マーヤ (以下、M) オーガニックのブランドや、アロマ療法士の方に調査してもらったアイテムを使っています。クレンジングもしくは洗顔の後、ローション、美容液という流れ。季節の変わり目は、いつも乾燥が気になります。ある時、肌の調子が崩れている試したけれど、結局、原因はわからなかった。そこからシンプルなケアに切り替えました。でもね、今回NEMOHAMOのトラベルセットBを10日ほど使わせていただいて、すごく良かったんです！春から夏に移行する時期に、肌が整ったので驚きました。

一宮 (以下、I) マーヤさんのお肌に合ったようで嬉しいです。和漢のエキスで肌を整えるスキンケアなので、マーヤさんのように乾燥などで肌にゆらぎがある方にもおすすめなんです。NEMOHAMOは植物をあますことなく使用していて、例えばローションには水を一滴も加えていません。植物の美容成分を壊さないよう丁寧にエキス化した「植物生体水 100%」で作られて

肌と心がどんな状態の時でも
受け入れてあげる

I コロナ禍でアップダウンする心を整えるため、ヨガを始めた方もいるそうです。マーヤさんが本格的にヨガを始めたきっかけを教えてください。

M 20歳で5年ぶりに日本に帰国して、子育てを始めた時です。もともとアップダウンが極端な性格だったので、環境の急変の中で生じている心のゆらぎの振り幅を小さくしたいなと思い始めて。子ども連れで参加できるスタジオを見つけ、初回でこれは心にいいものだと感じました。陰陽、左右、上下、前後、吸うと吐く…相反する力を意識するヨガを続けていくうち、ずっと良い状態でなくてもいい、すべて大事なのだということがわかり、心の揺らぎも愛おしいと思うようになりました。

— ネガティブもポジティブも、心も体もすべて自分の一部であり、自然の一部。良い部分だけで埋めようとするからアンバランスになるのかもしれないね。

I そうですね。肌も同じでいつも良い状態ではないんですが、それも含めて今の自分として受け入れて、労ってあげるのが大切なんですよ。一物全体という言葉があるように、NEMOHAMOも植物の一部だけを使うのではなく、根も、葉も、

実もまるごとすべて配合して商品をつくっています。ありのままの姿が1番バランスが取れていて、力があると考えているからです。植物の多くは福岡県の自社農園で育てられ、新鮮なうちに農園の隣にある工場でエキス化されます。私たちが年に何度かお手伝いに行くのですが、里山に行くとき自分も自然の一部だと感じられて、癒されます。

M 香りもすごく良くて、いつもより多い5ステップでしたが、癒されながら朝と夜のスキンケアを楽しみました。特にこれまでオイルクレンジングは潤いまで奪われる感覚があったんですけど、NEMOHAMOはクレンジングしながら保湿しているよう。肌がつっぱることは一度もなかったですね。

I 私もクレンジングオイルは初めて使った時にとても感動したお気に入りのアイテムです。ツバキやコメヌカなどの良質な一番搾りのオイルベースで出来ており、美容成分を含んだ植物オイルがたっぷり入っていて、「クレンジングはこれしか使えない」と言ってくださるリピーターさんも多いです。乾燥が気になるマーヤさんにはブースターオイルもぴったりですね。肌をやわらかくするのでローションや美容液がしっかり浸透したのを実感してもらえたのではないのでしょうか。マーヤさんがおっしゃるとおりクロモジ精油の香りも癒されますよね。
*角質層まで



トラベルセットBはクレンジングオイル、洗顔ソープ、ブースターオイル、ブライトニングローション、フルバリア美容液のミニサイズ5点セット。(トラベルセットは肌の悩みに合わせた3種類をご用意)



植物をまるごと使い、生命力あふれる和漢で
透明感のある肌へ

NEMOHAMO
ブライトニングローション
(内容量) 120ml ¥5,940(税込)

和漢として知られ、根根を越えて繁殖するほど生命力あふれるシソ科の植物カキドオシと、お茶などで古来より親まれ、整肌効果が高いといわれるマルベリーからまるごと抽出したエキスが、透明感のある澄んだ肌へと導きます。



NEMOHAMO 直営店
ネモハモ

☎075-352-3712
京都市下京区河原町通四条下
2丁目稲荷町318-6
GOOD NATURE STATION 3F
10:00~20:00 不定休
<https://nemohamo.com/>

*新型コロナウイルス(COVID-19)を含む感染症の感染防止対策として、掲載している情報に変更が発生する場合があります。サイトにて最新の情報をご確認ください。



< Campaign >
TSUMUGINO(本誌)をNEMOHAMO直営店にお持ちいただいた方に「ブースターオイル スムース+ブライトニングローション」2種のパウチをプレゼント。
*数量限定でなくなり次第終了。



「正しい記憶」／今回の個展「忘却の旅人-人間賛花」より

A BEAUTIFUL WILL

世界を豊かにする美意識

詩的、艶かしい、今にも羽ばたきそう——

およそ靴を表す言葉ではありませんが

シューズデザイナー／アーティスト・串野真也さんが手がけるのは

そんな言葉が思わず口をついて出る独創的で美しい靴。動植物をモチーフに

唯一無二の靴を通して「美」を表現する串野さんの新しい挑戦とは、そして「美しい」とは何か。

PHOTO 中尾写真事務所 TEXT 堤 律子

内なる世界と向き合って

鳥の羽根をまとい、ヒールの代わりに動物の爪先が力強く大地を掴む。串野真也さんが生み出す靴は、動植物の造形の美しさを大胆に表現した、斬新でいてエレガントな佇まいが特徴的です。「自然の摂理の中で、そうならざるを得ずにたどり着いた造形を僕はファイナルデザインと呼んでいます。それは目に見えないレベルで変化し続けているので、常に最終形態であり、最新形態。人が遺伝子レベルで魅かれてしまう美しさなのだと思います。僕は人が手に入れることのできないファイナルデザインを、ファッションを介して疑似体験することで幸福感を得たり、鼓舞されたりするような作品を目指してきましたが、最新作は履く・歩くなど人の足にどんな概念があるのかを“彫刻”という形で探究しました。これまでの表現手段である靴（ファッション）からどう逸脱し、想いを届けるかが今回の挑戦」と串野さんは微笑みます。

「自然物はファイナルデザイン」であるとの観点から、今までは動植物をモチーフにする事が多い串野さん。しかし今回は人間の内面的な部分との対話や感じ方を表現しているそうです。



過去作品より 左から「Bird-witched」「Chimera-boots」「peacock」



串野 真也
Masaya Kushino

京都芸術デザイン専門学校を卒業後、イタリアに留学。「Istituto MARANGONI」ミラノ校、ファッションデザインマスターコースにてディプロマを取得。帰国後、自然からインスピレーションを受けたファイナルデザインをテーマに、靴をはじめ様々なアート作品を発表。作品はイギリスの国立博物館、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館、NYのFashion Institute of Technology 美術館等に永久保存されている。

折ることが大切で、その意志がその人の美意識であり、責任を持つことに繋がります。会話や立ち振る舞い、作品から責任のある選択が見えた時、人は美しいと感じるのだと思います。お会いすると、とても朗らかで柔らかな印象の串野さんですが、揺るがぬ信念を感じさせられます。「今回『正しい記憶』という作品があります。1つだけの正しい記憶は存在せず、共有した人それぞれにとっての正しい記憶に変化していきます（美化される事もある）。その事を理解することが、多様性に繋がると考えています。また、移ろいの早いこの社会では、“正しさ”を求めるのではなく、“正しくあろうとする意識”の方が重要です。例えば小さな事ですが、道にゴミを捨てる自分は美しいかどうかを考えられる美意識があれば、そんなことはしないはず。その責任ある選択の積み重ねが人生を形成し、社会を、そして世界を形づくる。結局、人生を豊かにし、世界を救うのは個人の美意識なんだと思います。」



串野真也さんの個展「忘却の旅人-人間賛花」が開催された[清昌堂]やました別館 THE ROOMは、1階がギャラリー、2階がアーティストを招聘し支援するアーティスト・イン・レジデンス。事業の一環として串野さんが市内の小学生にワークショップを開催。「僕の想像を超える子どもたちの自由な発想には驚かされました。現在個展は終了

FEEL THE WISDOM BATON



北澤 みずき
Mizuki Kitazawa

インディペンデント・キュレーター。東京出身、京都在住。伝統工芸や骨董を主軸にホテルや商業施設の企画やしつらい、バイイングなどをポーダレスに担当。2018年より開催している工芸・手仕事の展示販売会 [Kyoto Crafts Exhibition DIALOGUE] のキュレーター。

最近巷では工芸や民藝など工業製品ではないものづくりが見直されています。その素晴らしさを伝えたいと、工芸に関する展覧会やイベントホテルのコーディネートなどを多数手がける北澤みずきさんにお話を伺いました。なぜ工芸品って美しいのでしょうか？

PHOTO 森 昭人 TEXT 川合 裕之 写真協力 ザ ロイヤルパークホテル アイコニック京都

工芸＝最適解という見解

「私の場合、前職でホテルをはじめとする商業施設の企画・設計・運営をする会社に所属していたこともあり、独立してからもホテル関係のお仕事を頂く機会が多いです。ロビーに飾る大掛かりなものから、お部屋の細かな備品まで、工芸に限ったコーディネートをするわけではありませんが、コンセプトやその場所にあった最適解を見つける仕事です。工芸品も人が必要にかられてつくりあげた最適解だと考えています。これ以上は最適化できないというラインまで機能性や形を研ぎ澄ませたもの。長い時間がかかって検証され、いけないものは削ぎ落とされているとも感じます。かつての人が手に入るものを駆使して育んできた物作りが、美しさに昇華していく過程を想像するのが素敵な時間になると話す北澤さん。先人のそのまま先人の知恵を引き継ぎながらゆるやかにブラッシュアップされる。そうした時の移ろいがモノに宿っているそうです。



[moksa Rebirth Hotel]の完全予約制プライベートサウナ [蒸籠]。水風呂には比叡山の地下水を使用しているそう。



北澤さんは、今年春に比叡山のふもと、八瀬にオープンしたホテル[moksa Rebirth Hotel]にも携われたそう。「moksaという名前は再生や循環を意味するサンスクリット語のモクシャから来ています。1000年以上前から養生の地として知られる八瀬の薫風呂一つつまりサウナです。サウナを現代風に再現しているのが1つの特徴です。科学も医学も無かった昔から、人はその場所に何かを感じ、またサウナの良さを直感でわかっていたこととなります。そう考えると、人は本来モノや場所に眠るパワーを感じられる感性を持ち合わせているのかもしれませんが。また館内全体のアートキュレーションを担当された[ザ ロイヤルパークホテル アイコニック京都]では、京都市中心部に立地するホテルであることから「多くの人が行き交う場所、そして様々なバックグラウンドを持つ人が集う場所ですので、多義的・重層的な解釈ができる空間を意識して京都にゆかりのある工芸の作家さんへお願いしました」とのこと。場所、人、モノに眠る何かを感じ、つなぎ合わせるお仕事であると感じました。

工芸 —— 時空をこえてつながる旅

moksaで提供されているHAHAHAUS (ハハハハス)さんの養生茶も北澤さんのオススメ。陰陽五行の考えに則って身体のバランスを整えるブレンド茶は、馴染むようにゆっくりと作用するのが特徴とのこと。食にも、人の体や自然と調和した最適解がたくさんあると北澤さんは言います。



秘められた先人達の感性

「最適解をくみとり、今の技術、生活様式、マインドで焼き直したものが今また沢山生まれてきていて、私に関わらせて頂いている [Kyoto Crafts Exhibition DIALOGUE] *でも触れて頂けると思います。そうやって少しずつ形を変え、検証されながら残っていくものを工芸と言うのではないのでしょうか。残念ながらモノも建物も1000年残すことは難しい。けれども作品を通して引き継がれる「感性」はずっと続いていくものだと思います。100年（前・後）、1000年（前・後）の人たちと時空を超えてつながれるロマンがあります」。工芸を因数分解することで、私たちはいつでも時空の旅に出かけられる。街の至る所で工芸に触れられる京都に北澤さんがとどまる理由がわかった気がしました。



滞在そのものが旅の目的となるホテルを目指している [ザ ロイヤルパークホテル アイコニック京都]の客室。

* [Kyoto Crafts Exhibition DIALOGUE] 2018年よりスタートした、工芸を中心とする手仕事の見本市&展示販売会。ホテルの客室が展示会場となり、京都を中心とした全国から多様な作り手が集まる。

SHOOT
THE
ABSOLUTE

種覚ゆ / The Records of Seeds
 ©建仁寺塔頭阿足院、KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭2021
 ©Takeshi Asano - KYOTOGRAPHIE 2021
 視/覚の風/遍在 ©√K Contemporary 東京、2022

真理が映し出す美の絶対値

京都に隣接する比叡平で育ち、ニューヨークで建築を学び、ベルリン在住中に建築家から写真家、そして現代美術家へ。「自然が近くにあり、余白のある生活ができるので」と、現在は京都を拠点に活動中。光と影、具象と抽象、地球と宇宙…二極の間をたゆたいながら真理に手を伸ばす八木夕菜さんに伺いました。「美しさってなんでしょう」。

写真協力 八木夕菜、Takeshi Asano、Jukan Takeisi TEXT 立原 里穂



『Blanc/Balck』より @DELTA / KYOTOGRAPHIE Permanent Space 2021

何かが浮かび上がる瞬間

作品との出会いによって、これまでなかった視点を持ってもらえるようにと、写真の概念を崩して再構築するような作品を発表してきた八木さん。2022年4～5月に東京で行われた個展「視/覚の偏/遍在」では、人の「見る」という行為にフォーカス。目で見た像と心のバイアスを経た像のズレを写真で表現。人の認識のゆらぎを感じさせてくれました。昨年の「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭」で展示され、現在は金沢21世紀美術館に所蔵されている『種覚ゆ / The Records of Seeds』からは、種の生命力の向こうに“農業と食の問題にどう向き合っていくのか”というメッセージが垣間見えます。「長崎県雲仙で在来種・固定種の野菜の種を守る“種採り農家”の岩崎政利さんを尋ね、土地や風土を記憶する種という自然界の記録装置を、人が生み出した記録装置＝写真で描写しました。種以外に用いたのは、その土地にある光、水、土、風。植物の生育に必要なものと同じ要素です。岩崎さんが続けられているその土地の風土を読み、自然に寄り添った農業に共鳴し、日光写真という写真技術

を選びました。「制作過程の中で和紙の上に土をかけたのですが、養分が溶け出してムラができたんです。そのムラが私にはなんとも愛おしく思えました。また、水の痕跡を器に写しとった作品では、完全に自然に作品をゆだねたことで、美が宿ったような感覚がありました。あるがままであること、邪気のない作意と行為が合致したとき、美しさが浮かび出た気がしました」。

邪念のない存在への憧れ

2019年に発表した『Blanc/Balck』もまた、写真と印刷の性質である光と影、色の性質に“ゆだねた”作品と言えます。多重露光は写真の撮影技術の1つで1枚の写真に何度も光像を重ねた結果、白(Blanc)に近づく現象です。多重印刷は1枚の紙に像を重ね、色が塗り重なることで、黒(Balck)に近づいていく。「重ねるほど一枚の写真の情報量は多くなるはずなのに、見た目は抽象化されている、結果として浮かび上がったのは、全てが存在しているのに色がない、白(光)と黒(影)の世界でした。それは、すべては空であるという禅の真理のように、美しく目に映りま

した」。この時も八木さんは、写真を重ねていく行為をあるがままにゆだねたと言います。写真や印刷などの文明を、本来の「機能」「役割」のところまで削ぎ落とし、受け入れた時に思いもよらず現れる真理。「音楽に絶対音感があったり、美しいハーモニーがあるように、アートの中にも美の絶対値のようなものがあり、それは試行錯誤の結果、思考や作為から離れた時に顔を出すことがあります。つまり邪念が無いもの(≒自然無為)が生み出した真理が美しかったのかもしれない」と八木さんは語ります。「真なるもの」を追い求め、八木さんの挑戦は続きます。



©Jukan Tateisi

八木 夕菜 Yuna Yagi
 Contemporary Artist. 2004年
 ニューヨーク・パソンズ美術
 大学建築学部卒業。カナダ、
 ニューヨーク、ベルリンを経て、
 現在は京都を拠点に。様々な
 素材を用いて視覚を描き出す
 平面や立体の作品、インスタ
 レーションを国内外で発表して
 いる。主な展覧会に、Pola
 Museum Annex 銀座
 『NOWHERE』(2018)、
 KYOTOGRAPHIE 京都国際写
 真祭「種覚ゆ」(2021)など。

Dialogue for Circular Economy
 YASUDA SANGYO GROUP × 一般社団法人リリス

ON THE WAY TO
CIRCULAR
ECONOMY人、物を、社会をリデザイン
鍵を握る静脈産業のマインド

人は有史以来、多くの便利ですばらしいものを産み出し、効率よく作られるようになりました。しかし結果として、現代社会のワンウェイの仕組みは大量のゴミをもたらした様々な問題を引き起こしました。この生み出す方の産業を「動脈産業」というのに対し、捨てられたモノをもう一度社会に戻すための産業を「静脈産業」と呼び、その考え方のバランスが重要視されています。

風間 美穂 Miho Kazama

一般社団法人リリス 共同代表
 「未来が歓迎する変化をつくりだす」ために、ビジネスとクリエイティブをはじめとした多様な専門家が集まり共創する組織で、プロデューサーを担う。



安田 義崇 Yoshitaka Yasuda
 安田産業グループ地球環境室室長代理

真の循環型社会に向けた人づくりを

風間 安田産業さんから見た循環型社会の現状を教えてください。どんな取り組みがはじまっているのですか？

安田 家電などはメーカーが回収するようになりましたね。僕もそれが一番だと思っています。もともとリサイクルスキームを作ってから製造することが必須かと思っています。例えばPC関係などは国内外問わず、既にそうなっています。リサイクルしやすい、環境負荷の低い代替素材の導入なんかも進んでいます。レアメタルも多く含まれているので、資産流出の観点からも有効です。レアメタルは、都市部のゴミの中に多く眠っているため都市鉱山なんて言われ方もします。

風間 今、私が関わっているラーニングプログラムでも廃材をリユース・再加工しようとしています。一番必要なと思うのは、学びを通じた循環型社会の人材育成だと感じます。第2回ジャパンSDGsアワードを受賞している鹿児島の大崎町を訪れた時、リサイクルネイティブが育つ環境に感動しました。小学生も自分で分別をするから、物を買う時点で資源になるかを考えているそうです。またリサイクルで処分コストを削減した後、浮いた予算は町や未来に還元しようと奨学金を作られていました。

安田 おっしゃるとおり、人材育成が必要です。今は完全サーキュラー社会への移行途中でアイデアを出

し合う事も必要です。しかし同時に、我々のような現場の実情と専門知識も是非お伝えしたいと思っています。必要なのは抜本的な社会フロー、インフラ、考え方の変革です。浮いた予算の使い方も重要ですね。

風間 今までのものを製造・販売する(いわゆる動脈産業)方と、安田さんのように収集・運搬・分別して再資源化を担う(いわゆる静脈産業)方の交界がとてもしなかつた。これからモノづくりを担う方は特に、再資源化の考え方や知識を安田さんたちと学び合えるといいですね。

静脈産業にもDXとビッグデータが必要

安田 注目しているのはDX化です。我々の業界はエッセンシャルワークだと言われているのに、先端技術の導入がすごく遅れている。運ぶものは違えど運送会社も変わらないはずなのにとてもDX化が進んでいて、紙の伝票を見なくなってきた。物流は最適化され、今日頼んだものが明日来る。それなら廃棄物のビッグデータをもっと活用して、物の無駄や情報の偏在を解消し、もっと社会全体も最適化できるはずですよ。

風間 素材から作って、売って、使って、捨てる。これからのビジネスは、その後の循環プロセスにも、どうつなげられるかが鍵になるかと。

安田 行政も企業も消費者も巻き込んだ、社会シス

テムの再構築が必要だと思います。例えば、ゴミが減れば(削減データでも実証できれば)、そのぶんゴミ処理代が減るわけで、国や市町村なども予算を捻出できる可能性があります。特にここは観光都市京都ですから、観光案内アプリ、防災アプリなどと一元化して、循環型観光サービスを展開できるはず。様々な負荷を低減する選択肢にポイントが付加され、ホテルでのウェルカムドリンクや観光施設での割引など、別の形の価値で循環も考えられます。不確実性をなくすとロスが少なくなるので、食事も予約が当たり前になればお良いですね。その分お肉のランクをアップなんてどうでしょう？

デジタル化を促進し、ビッグデータによる管理と資源の適切な管理をすることが一番重要で、安田産業は今後、そのための情報提供サービス社(インフォメーションプラットフォーム)に特化しても良いとさえ思っています。

風間 それは心強いですね!行政が財政難だからこそ、民間と協力して仕組みを再構築しなされると、ぐっと進みますね。ビックデータをもとに、サーキュラーエコノミーをどう共創したいか、立場を超えて描く後押しをしたいと思います。

安田産業グループ
 ヤスダサンギョウグループ

☎0120-53-1153
 info@yasuda-group.co.jp
 http://www.yasuda-group.co.jp/

Kyoto Sustainable Tourism

京都では、次の1000年を紡ぐための取り組みがはじまっています。今回は3つの違った切り口から持続可能な観光についての取り組みをご紹介します。

一つ目は、ホテルでの食への取り組み。地産地消からはじまり、様々な思いのある食材が見事な料理に昇華していました。“おいしい”の先にある幸せにまで目を向け、お客様におしつけないスタイルで提供することで、その喜びのバトンは回り回ってたくさんのHAPPYを生むかもしれません。

二つ目は、ホテルがはじめた都市養蜂の話。サービスのプロフェッショナルが、畜産の作り手となったとき、人としての素直な気持ちで芽生え、かけがえの無い地球を想うことでプロの仕事に磨きをかけていました。きっと、採取できる蜂蜜の量とは関わりなく豊かさが溢れ、世界のお客様を感動させるサービスとなって広がることでしょう。

三つ目は、観光案内バーの話。カウンターを通じて旅人と地元の方が交流する機会を生む。そして、お互いに小さな宇宙船地球号の乗組員であることを再認識しあった時オーバーツーリズムという心の壁を乗り越える可能性が生まれました。

次の1000年もワクワクしよう



サステナブルな観光コンテンツにご使用いただけるロゴを作成いたしました ©DMO KYOTO

コンセプト文及びロゴ申請はこちらから
京都市観光協会(DMO KYOTO)では、未来の環境や社会への影響を考慮した観光スタイルを目指すコンセプト「Kyoto Sustainable Tourism」とそのロゴマークを作成しました。コンセプトにご賛同いただける方は右記QRからお申し込み下さい。ロゴマークをご利用いただけます。次の1000年も京都が京都であり続けるために、ともに紡いで頂ける方を探しています。



01 | Kyoto Sustainable Tourism Report

HAPPY & SUSTAINABLE DINING

自分も、自分以外の人も幸せになる食

ストレートに“サステナブル・ダイニング”。そう打ち出したのは、二条城を目の前に臨む HOTEL THE MITSUI KYOTO。ラグジュアリー・ホテルによるサステナビリティへのアプローチは、スタイリッシュで純粋な願いでした。

PHOTO 森昭人 TEXT 堤律子

「なんかいいことしたな」という ささやかな食体験を

イタリア語で「複数の窯」を意味する[FORNI(フォルニ)]は、洗練された空間で地産地消の素材をグリル料理などで味わえるイタリア料理店。HOTEL THE MITSUI KYOTOでも人気のこのレストランに、コンサルタント・シェフとして招かれたのが、米澤文雄シェフです。「米澤さんは、22歳で単身ニューヨークに渡って以降、様々なコンペティションで受賞を重ね、南青山にはご自身のお店も。特にヴィーガンやサステナブルについての造詣が深い彼が[FORNI]とコラボレーションしたら、一体どんなシナジーが生まれるだろうかと考えたんです。私たちができるサステナブルな取り組みについては日々実践していますが、海のプラスチック問題と同じくらい魚の乱獲の問題が話題になった時、これはいよいよ大変なことだと。“サステナブル・ダイニング”とテーマを明確に打ち出し、米澤さんの料理を介して発信しなければと強く思いました。そう説明するのは、同ホテルの料飲部長を務める佐藤さん。テーマは誰にでも分かりやすく、そして押し付けがましくない形で、とあらゆる方面への気遣いを忘れません。「料理が美味しいのは大事ですが、地球のためにこれを食べている、と意識込むのではなく、美味しいねと楽しみながら食べた後に『なんか少しいいことしたな』と感じていただけたらいいと思っています。いわゆるギルトフリーの体験を重ねることで、無意識のうちに地球のことに目を向ける意識が芽生えれば」と佐藤さん。規格外の野菜や、一般的には敬遠されがちな経産牛(お産を経験した牛)も最後まで愛されてほしいとの願いを込めて、また乱獲を抑制するための養殖魚を積極的に取り入れるなど、美味しさの先に目を向け、サステナビリティを体感できるひと皿を提供しています。

循環に関わるすべての人を想う

また生産者に対しても、同ホテルの考えは明確です。「生産してくださった対価として生産者の方々に正しくお金が行き渡るよう、私たちは食材をちゃんと美味しいものに変えて、お客様から対価をいただくことが使命です。そうでなければ、日本の産業は持続できない。“自分以外の人も幸せになる食”を考えることが大切」と米澤さん。「ひと昔前は企業が提示したものを消費者が選ぶ、という構図でしたが、欧米同様に、日本も消費者側からの声が高まり企業が応える、という流れが徐々にできています。今はちょうど変わりつつある時。“選ぶ責任、買う責任”の意識が日本にも広がっているからです。[FORNI]を訪れるお客様は、ハレの日に『社会へ良い投資をした』と考える、感度の高い方がとても多い。それに呼応し、共感していただける食をお届けすることで確実に未来へと繋げていきたいです」。



7月1日・2日に開催された「米澤文雄氏コンサルタントシェフ就任ローンチイベント」での3皿。上から「賀茂茄子のハレミジャーナ」「蟹の湯葉巻 出汁ソース」「マルゲリータ ドーロ」。賀茂茄子、湯葉巻の湯葉、ビザの柚子、久美浜ジャージーモーツアレラなど全てのメニューに京都の食材が使用されている他、お出汁など京都の食文化もリスペクトイタリアンと融合させている。



コンサルタント・シェフに就任した米澤文雄シェフ



料飲部長 佐藤 崇治さん



HOTEL THE MITSUI KYOTO
☎075-468-3110(代表)
京都市中京区油小路通二条下る
二条油小路町284
<https://www.hotelthemitsui.com/>

HEART BEAT FROM BEES

ミツバチがおしえてくれたこと

「ブン、ブン、ブン、蜂が飛ぶ。」
さて、ここは京都タワーが真横に見える養蜂場。
京都駅前にあるホテル、THE THOUSAND KYOTOの屋上では今年3群目の巣箱が密かに誕生しようとしていました。

PHOTO 森 昭人 TEXT 上山 賢司

SDGsを実現するライフスタイルを提案する京阪グループの「BIOSTYLE PROJECT」の一環として、様々な取り組みを行っている京阪ホテルズ&リゾート。2020年に社内の事業構造改革プロジェクトで検証したアイデアの中から実現した1つが、この屋上での都市養蜂です。2021年5月に岐阜県から1群目の巣箱が届き、約10,000匹のセイヨウミツバチを迎えてからちょうど1年がたち、社内の有志で構成された都市養蜂プロジェクトチーム、通称「養蜂部」は現在9名。テレビでよく見る蜂よけの面布をかぶり、手には燻煙器。蜂がブンブン飛び交う中、岐阜県の養蜂家さんにオンラインで手ほどきを受けながらの本格的な作業に驚きました。ここは京都駅のすぐ横にあるホテルの屋上です、そして作業をしているのはホテルで働く人達なのです!

昨年は約7kgの蜂蜜の採取に成功。小瓶につめた“初”蜜は、社内で養蜂のプロジェクト周知のため社員に配布されたそう。「毎週金曜日の午前中を内検日と決めて、プロジェクトメンバーが毎週欠かさず巣箱をパトロールしています。スズメバチによる襲撃やダニがもたらす病気からの予防、女王蜂が元気かどうか、心配はつきません。セイヨウミツバチの飛行範囲は約3km。東山のお寺の豊かな草花、梅小路公園や鴨川のほとりのお花など、蜂さんはいろいろなところから蜜を集めてきてくれます。かわいいでしょ?」と話すのは同社の取締役井上さん。養蜂部のリーダーです。途中で2群目の巣箱を迎え、順調に蜂数が増えたのを見計らったこの日の仕事は「分蜂(ぶんぼう)」と呼ばれる大仕事。別で用意した巣箱に、王台付きの巣礎を移します。これで、新しい女王蜂と半数の働き蜂が別の蜂蜜工場をスタートするのです。つまり“のれん分け”です。

同じく養蜂部兼ホテルのオンラインショップ担当である関口さんは「みんな楽しんで取り組んでいます。1匹のセイヨウミツバチが生涯で集められる蜂蜜は小さなティースプーン1杯分なんです。そんな貴重なものを分けてもらっているという感覚が大きいです」と語る顔は、もはや養蜂家や環境活動家。たった7kgの蜂蜜ですが、自らが関わることで、自然や動植物から恵みを分けてもらうという感覚がわいてくるそうです。

巷では激減するミツバチの話。園芸のテキストを開くと「確実な受粉をさせるには人手で」といった文言がよく見られるようになった今日、受粉というあたりまえの自然現象は、実は当たり前ではなかったことに気付かされます。「目の前にいるのは生き物で、体調の良し悪しもありますし、蜜を採取する植物の状況もあります。ふと気がつくと、気候変動のことなんかにも気になるようになりました」と話すのは経営企画室の永井さん。自分達の作った蜂蜜を早く製品化してお客様に届けたいと語ってくださいました。蜂とともに働くことで、自然の摂理に触れ、慈しみの心が育まれる。そしてチームビルディングにも!不便さも含めて楽しんで、仕事にやりがいを感じる。ホテルの屋上では心温まる風が吹きはじめていました。この風はきっと旅人の心を潤し、物質だけではない循環を産み出していくことなのでしょう。



奥に見えるのが京都タワー



この日は、蜂蜜も採取。巣板6枚で合計6kgが取れました。*販売用製品の作業時は、帽子・白衣・手袋を着用いたします。



THE THOUSAND KYOTO
☎075-354-1000
京都市下京区東塩小路町570番
<https://www.keihanhotels-resorts.co.jp/the-thousand-kyoto/>



カウンターに自ら立つ西澤さん

JOURNEY ON THE TABLE

バーで旅する。カウンターがつなぐ物語

PHOTO 森 昭人 TEXT 上山 賢司

オーバーツーリズムを経て

「もうこれ以上来ないでほしい」。未曾有のインバウンド景気の中で京都におこったオーバーツーリズム。「とても悲しかった」と語るのは、かつて旅行会社に勤めていた[SIGHTS KYOTO]を運営する西澤さん。なぜ、旅行者だと迷惑に感じてしまうのか。これが手土産を携えた友人や知人だったら?もちろんひっきりなしという訳にはいかないけれども、ウェルカム感は一気に上がるはず。ここ[SIGHTS KYOTO]は、祇園に近い花街で有名な宮川町にある観光案内バー。観光案内だけでなく、京都の地ビールやクラフトビールが楽しめる場所です。また、2F・3Fはコワーキングスペースになっており、オフィスとしての法人登記も可能。リモートワークする地元のクリエイターやフリーランサーが築140年の京町家を改装したノスタルジックな雰囲気の中で働いています。

SIGHTS KYOTO の考える観光と街づくり

「このカウンターがこの2つの機能をつなげる重要な役割なんです。西澤さんの中にはある構想がありました。「オーバーツーリズムという状態は、旅人と地元住人が同じ空間内でひしめきあった状態とも言えます。であれば、同じエリア内でそっぽを向き合うのではなく、つながりあってコミュニティになればいいんです。そうしたら、助け合えるし、仲間に迷惑をかけようなんて思わないですよね?逆にお互いの無いものを提供しあえる」。パーテナー兼観光案内人は、旅行者と地元の方、あるいは2F・3Fで働くリモートワーカーをつなぎ合わせる役割を果たし、仲間にしていく。旅行者は地元の穴場情報を聞けるし、地元の方は海外に行かずとも世界の土産話を聞き、旅した気分を味わうことができる。遠い国に友人を持つことで世界が広がったような気持ちにさえなれる。新しい価値

に出会うことが旅の目的のひとつであるならば、この空間でお互いにそれが叶っていると言えるのではないのでしょうか。「旅行者が来てくれて楽しい」。そう言ってもらえることが西澤さんのシンプルな目論みでした。

観光は入り口

実は今年、[SIGHTS KYOTO]は不動産業の免許も取得し、移住者の住処を探す手伝いも本格的にはじめるそう。旅行で訪れた街を好きになり、住んでみたいと思った場合の自然な流れをサポートできる体制が整った。そして[SIGHTS KYOTO]がある東山区は高齢者率や空き家率の高い場所。「旅行者が増えるほど地域の課題を解決する」。サステナブルツーリズムの1つの姿を見たような気がしました。



2Fのワークスペース



SIGHTS KYOTO
☎070-7561-3125
9:00~21:00
京都市東山区宮川筋2-255
<https://sights-kyoto.com/>



REPORT

THE SECRET OF TASTY

おいしい日本酒のつくり方!? ~オーガニック日本酒のはじめかた~

4月30日、「月の桂」醸造元である[増田徳兵衛商店]は、京丹波町の山麓で5反だけの田植え体験を実施しました。これからこの田んぼは有機農家山口正章さんの手によって化学肥料を使わずに育てられ、年内には特別限定の日本酒となる予定です。この日は天候にも恵まれ、40名ほどが集い、素足の裏で自然とのつながりを堪能しました。

PHOTO 中尾写真事務所 TEXT 川合裕之



増田さんによる田植えレクチャー



ミスSAKEも例外なくどろんこに



京丹波町長や生産者さんらと
囲んで、真剣な会話も



田植えを終えて
心から笑う増田さん

「まだ植えてもいませんが、8月末ごろには稲刈りにもご参加いただき、年内には仕込みをして特別限定の酒をつくりたいと思います」と、行き先のバス内でアナウンスをしたのは、十四代目当主である増田さんご自身。この日は息子の醇一さんも含めご家族、蔵人総出でのイベント。米作りから体験することで芽生える、“新たな思い”を感じる酒造りのスタートです。今回の選ばれた品種は“五百万石”という酒造りに適したお米です。新緑の山々の麓、夏には蛍や鮎も見られる由良川源流の小川のすぐ側で、参加者は楽しく交流しながら直に伝わる泥の温度を感じていました。「小さな苗ですが、植えたたんが我が子のような感情が芽生えました。今から台風が心配です」と、参加者の中には、早くも何かの思いが芽生えはじめていました。酒に限らず食の原点は自然。その自然と

のつながりにもう一度寄り添うことで、いったい何がおこるのでしょうか。農場を運営する山口さんは「最近、田舎の子でも田植えをすることはなかなか無いので面白い取り組みですね。五百万石を扱うのは初めてですが、化学肥料は入れない予定です。どうなるかはわかりませんが、わからないからこそ仕上がりが楽しみです」と語ってくださいました。また参加者からは、「酒の息吹を感じるセレモニーのよう」「醸造の最初の一步に立ち会えたようで感激している」といったコメントが集まり、汗をかいたあとの充実感に満ちた表情は印象的でした。日本酒好きならではの「これから酒は1滴もムダにできない」には思わず納得です。最後は田植えを終えて、みんなで楽しくBBQとなりましたが、増田さんのアツい話は続きます。「飲み手も参加して、みんなの気持ちで育てる。

そういう心意気がないと良いものは育たないし、作れないのではないかと思います。農業を意味する“agriculture”という言葉の中には“culture”が隠れていますよね。こうして体験することで、言葉では言い表せない事——酒造りと農業という、切っても切り離せない“culture”——を体に染み込ませて、みんなで心を耕すのです。きっと美味しいお酒ができるはずですから、正月はこれで乾杯しましょう!」順調に進めば8月下旬に稲刈りが実施される予定です。しかし、まだ植えたばかりだということ、すでに心が“うまい酒になる”と感じています。今後は試行錯誤を繰り返しながら、徐々にオーガニックへと移行するそうです。オーガニックとは、どこかの機関に認定してもらうものではなく、作り手の生き方や価値観そのものかもしれない。

大地からの 便り

PHOTO, TEXT 上山 賢司

自然から少し離れてくらすようになった私たち。確かに便利にはなりましたが、はたして豊かになれたのでしょうか？ 社会問題は複雑にからみ合い、ますます問題は増えるばかり。そんな私たちの暮らしに不足しがちな“何か”を求めて大地の近くで営みを続ける農家さんの声を聞いてみることにしました。

COLUMN

LETTER FROM THE EARTH



どう生きていきたいのかを農業で実践

「今年は大イコンサルハムシが見られますね。温暖化の影響でしょうか、この辺ではほとんど見なかったのですが。有機JASで使用を許可されている農薬もありますが、本当に使いたくないので悩みます」と話してくれるのは、京都府南丹市で野菜を育てる児島さん。重度のアレルギーと喘息に悩んでいたそうで、高校生の頃からぼんやりと自然と暮らしたい。自然との共生の中に、現代病の原因や治癒の鍵が眠っているのではないかと感じていたそうです。そして東日本大地震をきっかけに、より具体的にご自身の生き方や、未来に残したいものごことを考え、1つの生き様＝結論として、有機JAS認定を受けての野菜農家に行きつきました。野菜の持つ自然な力を引き出せるよう、堆肥も植物性のものにこだわっているそうです。

多様性の中にある恵(めぐみ)

児島さんは農福連携(農業における障がい者の就労など)も実践しています。「これは農業から学んだことですが、人間も野菜も農地も全てにおいて多様性が必要。見た目にとらわれない生き方も重要です。『相手の目を見て、相手の耳で聞き、相手の手で触らないと、本質は理解できない』——心理学のアルフレッド・アドラーの言葉であり、私の好きな言葉です。同情ではなく、僕は彼らに共感しているのです」と話してくれました。続けて今の、循環型社会に足りない要素をこう語ってくださいました。「草、虫、野菜、農家、八百屋さん、食べる人。それぞれがぶつ切りされていて、何かを手渡して行くのではなく、すべては目に見えない何かでつながっています。相手と共感・共生することで、血液のように自然にめぐり出すことを循環、もしくは“恵(めぐみ)”



京都府南丹市 京のべし 児島ひかるさん

と呼ぶのでは無いでしょうか。わざわざ循環させようとする時点で、何かとつけたような“よそよそしさ”があります。地球に元からあるモノは決して廃棄物になりません。役割を終えてなお、だれかの糧になるという当たり前の循環が崩れかけようとしている今、心無きモノの循環では、本当の幸せを得ることが難しいのではないかと感じました。「モノと心」、その両方がめぐる循環が大切だと教えて頂いたような気がしました。



REPORT

FUTURE DESIGN OF SOLAR PANEL

太陽光発電の未来 「エコシステム・プラットフォーム・オオサカ」

2022年6月、一般社団法人大阪青年会議所の持続可能性ビジネス構築委員会による呼びかけで、あるプラットフォームが立ち上がりました。2030年代に約80万トンの廃棄物が出るとも推測されている太陽光発電システムのリユース・リサイクルを今年のテーマに据え、この大きな環境インパクトに備えつつ、これからの時代のものづくりを、産官学で考えていくための“つながり”の創出が主な目的です。様々なレイヤーの方が参加しキックオフミーティングが開催されました。

PHOTO 森 昭人 TEXT 上山賢司 参考資料:IEA PVPS 2022、消費エネルギー庁 日本のエネルギー2021年度版

まずは普及が全てだった

今まで全世界的に奨励されてきた太陽光発電。待ったなしの温暖化対策として、あれよあれよと導入が進んだのは皆さんの記憶にも新しいはず。しかし忘れてならないのはパネルの寿命[※]。一気に導入が進んだ分、寿命と同時に大量の廃棄物となってしまう可能性が示唆されています。寿命を終えるほど使い切ったのだから、十分に環境負荷軽減に役立ったと看過できない問題であるのはその物量で、2030年頃からの80万トンを超えて2050年までに累計で600万〜700万トンが日本だけで廃棄物になる可能性があるそうです。日本における再生可能エネルギーの電力比率は18%（2019年）。再エネの中に占める太陽光の導入量は世界第3位（2022年）と、国土面積の割合からしてずいぶんと健闘していることも伺えます。また資源エネルギー庁による2030年度までの導入目標ではさらに現状の1.8倍程度だというから、この問題はますます軽視できません。リサイクル方法が確立されていないまま導入量が増える産業は、結果的に廃棄物を増やす

産業となり、太陽光パネル以外の産業でも問題視されています。今回の取り組みの中核を担う企業の1つに、大阪に本社を置く株式会社浜田があります。同社は鉄スクラップ処理を専門として創業、その後解体撤去などの事業を展開し、昨今ではPCB（ポリ塩化ビフェニル）や水銀含有廃棄物などの処理困難物に強みを持った会社。太陽光パネルのリサイクル事業を始めようと思ったきっかけは、2013年から20〜30歳代の若手向け経営勉強会を開催している中で発表されたアイデアの中にあっただけのようです。もともと大手液晶テレビメーカーと共にガラスのリサイクルについて研究しており、ガラスを多く使う製品として太陽光パネルが浮かび上がりました。事業案が語られた当初は「状況となるのは2030年ごろから」と、まだ先の話として扱われかけました。しかし研究期間も踏まえるとそれほど先の事でもなく、競合他社との差別化の意味でも、いち早く取りかかろうということになったそうです。



太陽光パネルを“桂剥き”

太陽光パネルのほとんどは結晶シリコンタイプのもので、構造を簡単に言えば、シート状の太陽光電池をガラスに貼り付けた状態のものです。しかし、水が入らないようにガラスと封止材でしっかりと圧着されているため、非常に剥がしにくく、無理に剥がすとガラスが割れて粉々になります。従来は、役割を終えた[※]太陽光パネルは外枠（アルミフレーム）を取り除いた後、粉碎されほとんど埋め立て処分されていたそうです。鉛などの有害物質を含んでいるため、特定の埋立処分場への受入が集中し、限られた容量しかない埋め立て処分場への負担が増える可能性があります。株式会社浜田では、研究開発のために経済産業省の補助金も取得。4年の歳月をかけて「ホットナイフ方式」という、新しいリサイクル方法を株式会社エヌ・ピー・シーと共同研究。京都工場での運用までこぎつけたそうです。仕組みを簡単に言えば、アルミフレーム、ジャンクションボックスを取り除いた後の太陽光パネルを、300度の刃物でガラスと接着してある太陽光電池を分離す



- 1 太陽光パネルから、まずアルミフレームとジャンクションボックス（太陽光モジュール間を接続するための中継器）を取り外す。
- 2 ホットナイフにより、太陽光パネルをガラス板とそれ以外に分離する装置。1日300枚の処理が可能。
- 3 ホットナイフで“桂剥き”されるパネル。丸まっているのが剥き取られた太陽光電池セルと発電シート。
- 4 “桂剥き”後の板ガラス
- 5 今回お話を伺った株式会社浜田営業部2課係長 堀 智広さん
- 6 “桂剥き”の後に破砕された太陽光電池セル。一番右が銀含有量が高い。

る方法です。ミクロン単位で刃物の角度を調整し、最終的には回転出力の調整機構を独自に開発することで実現した技術です。社長の浜田さんは、この作業を料理人の技に例えて「パネルの桂剥き」と呼んでいるそうです。この方式は、現在の太陽光パネルの約96%を占めていると言われている結晶シリコン型をリサイクルするのに有効な手段で、この方式以外にも、リサイクル方法は様々あるようですが、一番の課題はリサイクルされるガラスの活用方法や買取価格。議論はまだまだ始まったばかりのようです。

課題はリサイクルガラスの付加価値向上

アルミフレームはそのままりサイクル可能で、鉄市場と同じようにリサイクルの手間暇に見合う市場があります。しかし、ガラスは未使用品でも比較的安価で、混じる不純物の具合によって、活用先となる出口（買取先）もかなり狭く、リサイクルが積極的に進まない業界である事が問題のようです。「きれいに桂剥きしたガラスの売価は1トン2千円〜3千円。それに比べて鉄は1トン5万円〜6万円。まだまだこれが現実ですが、しかし次の時代がもう目の前までやってきているのに、何もしないで待っている訳にはいきません」と浜田さんは語ります。現在同社では、アルミフレー

ムは金属系リサイクルを行うグループ会社へ、ガラスは板ガラスのままガラスメーカーへ、太陽光電池セルは細かく破碎して、リサイクル価値の高い銀を多く振り分けた粉体物にしているそう。ガラスに関しては蛍光X線分析機をかけ、メーカーによって異なるガラスの成分をQRコードで見える状態にしているとのこと。実はそうすることで買取価格が上がることは無いそう。同社担当の堀さん曰く「ここまでしたので何かに使って欲しいという、言わば気持ちの表れです」とのこと。大阪青年会議所持続可能性ビジネス構築委員会では、この事を見越し、キックオフミーティングの段階から特殊なガラスを取り扱う企業にも参加を呼びかけました。ガラスメーカー、太陽光パネルメーカー、廃棄物処理業者が同じテーブルで話し合うことで未来を切り開こうと言うのです。メーカー側は、リサイクルのしやすさも考慮した設計へ、そして製品としての価値を終えた後の活用先も決まっていることで、いつしかワンウェイ（作って、使って、捨てる）だった産業が、サーキュラー（環）へとつながる未来が期待されます。浜田さんは、工業分野だけでなく、アートの分野などへの活用へも夢を膨らませているそうです。現在、株式会社浜田で収益になっているのは、リユース市場。回収された太陽光パネルを検査し、

まだ使えるものを中古品販売しているそうです。「まだリユース・リサイクル事業で投資コストを回収できているとは言えませんが、リユース品の販売は海外を中心に着実に伸びています。今までこの業界はコスト重視の一辺倒でしたが、エコの観点からリサイクルされたものの方が価値が高いという声も聞くようになりました」と堀さん。今後、同委員会では、大学などの研究機関も含め産官学による連携でビジネスマッチングを促進し業界での役割分担の明確化や、コスト面や関連法規での盲点などを明らかにするなど行政へ提言を行う他、技術の確立や具体的な解決型商品の開発などで路を切り開き「大阪モデル」を発表していく予定とのこと。関西から少しずつ未来が動き出していました。

[※]寿命・役割に関して：太陽光パネルの耐久年数は20年〜25年と言われており、メーカーが100%の能力を保証している期間。実際にはすぐに壊れるのではなく、出力が減衰していく事が多く、耐久年数の倍くらい使えるものもあるようです。近年では自然災害（水没、雪、雹）による破損・廃棄も増えて来ているそうです。また、売電による投資案件として設置される場合、場所の借地期限が25年の契約になっている場合もあり、太陽光パネルの耐久年数とは関係なく撤去せざるを得ない場合もあるそうです。技術進歩によって出力量が上がり、新しい太陽光パネルの方が同じ敷地面積で効率良く発電が可能となるため、まだ使えるパネルが取り替えになることも。家庭用であれば、屋根の防水シートの耐久年数が10〜15年で、このメンテナンスの時に再設置するか否かの選択肢を迫られ、投資コストの回収可能性がわからないとの判断で廃棄されることもあるそうです。様々な条件で廃棄、または役割を失う機会があるようです。